臨床社会学の方法

(3) 動機の語彙

中村　正

１．正義の暴力―「アンパンマンをみたくない！」という息子

母子でシェルターに避難したことがあるという若い母親のDV被害体験を聞いた。心を痛めたのはアンパンマンをみたくないという５歳の息子の話だった。アンパンチというシーンが夫の暴力場面と重なるのだという。子どもたちが好きなアニメをみることができない程に面前で暴力を振るっていたのかと思うと聞いているだけで辛くなった。

さらに妻にはその文脈も辛いのではないかと心の中で思ったが質問はできなかった。アンパンマンの暴力は、暴力が行使される際の常として、バイキンマンという悪をやっつける「正義のための暴力」として使われる。暴力を振るう夫も同じような言い方をする。「殴らせるお前が悪い」と。それがバタラー（慢性的に家族に暴力を振るう人のことbatterer）の常であるからだ。連載の第１回目に紹介した「暗黙理論」はこうして暴力を正当化するように機能している。男性の暴力を支える信念が垣間見える（アンパンマンの名誉のために一言。アンパンマンは自己犠牲的でもある。少々複雑なつくりになっているが殴る人は都合のよいところだけを真似る）。

この正義の暴力という意味づけは、社会のなかではよくある記号（勧善懲悪物語、テロ対策、暴力で強くなるなど）として流通し、個々人の動機として汲み上げられる。暴力、いじめ、ハラスメント、虐待、体罰などの対人暴力を正当化する説明として作用する動機の語彙となっている。もちろんそれは加害者にとっての正義なので身勝手な正義である。

特に男性の暴力加害者によくみられる語彙である。彼らは「糺すこと」が好きである。その基準は自らが設定する。警察になりたがるとでもいえようか。コントロール感が満たせるからだろう。他者非難も好む。怒りの火種を至る所からみつけてくる。怒りは自らを活性化させるてっとり早い感情だからである。

正義の暴力という意味づけは、国際社会においてテロ戦争が昂じていく過程から、離婚問題で男女間の葛藤がピークに達していく過程、そしてけんかで互いのあら探しが深まっていく過程にいたるまで、実に多様で身近に

Nakamura Tadashi 立命館大学

ある。自らの主張が正しいと思い込み、互いに譲らない。しつけのためと称して虐待をくわえる親も子どもをきちんとさせるためにという正義の動機を語る。それほどに正義と暴力は近い領域にある語群だ。

２．動機を語る言葉＝語彙

ライト・ミルズというアメリカの社会学者に「状況化された行為と動機の語彙」という論文がある（ライト・ミルズ、Ｉ・Ｌ.ホロビッツ編、青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』、みすず書房,1971年)。人々が自己や他者の行為を解釈し説明するために用いる「類型的な語彙」について指摘した論文である。

動機とは「行為や言語を個人に内在する主観的で深層に横たわる諸要素の、外的表現と解するよりもむしろ、社会的に状況づけられた動機の布置と規範的な行為とから成る、いくつかの類型的な枠」だという。動機は社会のなかにあるということだ。

対人暴力問題について行為者は自らの暴力行為を正当化し、心の声としてつぶやきながら実行している節がある。対人暴力の動機を理解するに際しては、社会のなかにある類型化された枠のなかにある語彙をもとに、一種の内言のようにして暴力をふるう理由として選び、取り入れ、編成し、実行へと至る過程があり、そこで動機として構成されていくこととなる。

動機は予め自らの内部にあり、何らかの行動へと駆り立てる要因のようなものとして考えるのではなく、社会のなかに用意された暴力肯定要因や他者非難の種をもとに動機が構成されるということを主張するのが「動機の語彙論」である。

だから動機は事後的かつ外在的であるために言葉を必要とする。そこで用いられる語彙は行為者の内側からでてくるのではなくて、周囲の環境から取捨選択される。その人が生きてきた過程で有意味だと思った意味づけ、シンボル・記号、理由などから、理解可能で説明できるようにその人らしく調達され、構成される。純粋に内的な動機、つまり「本当の動機」が行為を導くのではなく、既存の意味の体系をもとにしてその個人によってブレンドされて動機は「構成される」と考える。

言葉と現実の関係についてミルズはいう。「動機は行為者の語彙によって限界づけられている」と。状況に適した動機の語彙を学び、行動の要素とし、「言語的に表現された動機は、個人に内在する何ものかの指標として用いられるのではなく、状況に拘束された行為に対する動機の語彙のタイプを推論するための基盤として用いられる。」

社会のなかには類型的な動機の構造が用意されている。「動機は個人の内部に固着した要素ではなく、社会的行為者によるその行動の解釈をおしすすめる条件」として作用しており、「言語行動にアプローチするばあいに、それを諸個人の個人的な状態に帰属させるのではなく、いろいろに分化した行為を統一あるものに整合するというその社会的機能を観察するべき」だという。

対人暴力にかかわる動機の語彙は社会の側にある暴力性や攻撃性、ジェンダー意識、親密な関係性についての観念、男性の人権意識あるいは正義の観念などにかかわる領域において類型化されている。

対人暴力などの逸脱行動は、行動化が先にあるので本来は言語化しにくい人々が選択する「からだのことば」であることは以前にも指摘した。行動化が優位な人たちの逸脱行動、対人暴力なので、社会に漂う動機の語彙を説明のために用いるという場合、既成品で安直な語彙あるいは理解を超える語彙が選ばれることになる。

それら逸脱行動や対人暴力という行為の動機を理解することは当人にとっても難しい。言葉が精緻ではないので行動化の過程に入り込み、語彙の貧しさという迷宮に迷い込んでいるからである。どうしてそんなことをするのかという問いに、たいていは他者非難がでてくるだけである。感情を語る語彙も少なく、「むしゃくしゃしていたから」としか語らない。

だから警察の取り調べでクリアにされたとされる動機は立証しやすいように構成されていくことになる。少年が非行に走る動機としてよく取りざたされるものに「授業がわからない」とか「学校がおもしろくない」というのがある。「教師が悪い」「学校が悪い」といい、他罰的となる。あげくのはてには「うざい！」といって終わる。

こうした動機の語彙は問い詰めれば問い詰めるほど貧しくなり、開き直るか、投げやりになることを誘発する。反省はうわべだけのものになる。貧しい語彙しかもたないから行動化するのだから当然である。

動機の語彙の選択や構成の仕方が貧しいのだから、脱暴力への動機を形成する取り組みにも工夫が要る。無理強いされたようになる加害への直面化や更生にむかう矯正教育は表面的な反省や懺悔を帰結させるだけであり、ときには動機のねつ造のような事態にもなり、あまり効果はない。

もちろんなかには狡猾に動機の語彙を操るタイプもある。言語化優位であるために感情が伴わず、饒舌さが狡猾さと同居する。

行動化するタイプの語彙の貧困さから、言語化するタイプの語彙の過剰さに至るまでの幅があるといえる。

動機として用いられる語彙は社会に存在している意味の貯水池から汲み上げられる。また、自分の行為を弁明したり正当化したりするときに、それら既成の語彙群のなかから咄嗟に選んだようにみえるが、それは内言のようにしていつも反芻したり、言い聞かせたりして、正当化されているからこそ即座に選択されるので、そこには日常的な思考と認知の枠があることになる。

動機の語彙論を今回取り上げたのは筆者が脱暴力支援のための社会臨床と個人に対応する加害者臨床を共にすすめたいと考えているからである。社会の宿す暴力性や攻撃性は「正義の暴力」という認知の類型に根ざして存在している。個々の暴力行為者は動機の語彙としてそこから選択する。個々の加害者臨床で見えてきたことを社会の物語のもつ暴力性や攻撃性、つまり暴力加担性と重ねて指摘し、

それを社会の脱暴力化へと反映させるのが加害者に対応するもののアドボケイト（代弁）であるし、男性性ジェンダー問題に敏感であるべき臨床実践者の役割だと考えるからである。

こうして加害者臨床と社会臨床を重ねるという関心を持つ「援助者の動機の語彙」もまた社会の側に蓄積させていきたいと考えてきた。

３．取捨選択する能動性

もう少し暴力理論にそくして考えてみたい。暴力を振るう人のパーソナリティ研究と社会構造の関係について心理学的研究をすすめるドナルド・ダットンの問題意識を紹介しておきたい。彼の主著を翻訳してきた経過もあり、概要だけになるが紹介しておきたい(『夫はどうして愛する妻を殴るのか』作品社、『虐待的パーソナリティ』明石書店)。

彼の提起している論点は三つある。①DV理論は、どうして妻だけに暴力がむかうのかについて説明をしなければならないこと、さらに、②男性性と暴力は不可分だがある特定の男性が暴力を振るうことの説明をしなければならないこと、そして，③同性同士の関係でも生起することや女性が加害者となることを説明すべきことである。

説明は次回以降とするが、①から③を解くのに、「虐待的パーソナリティ論」と「親密な関係性における暴力」というアプローチをすべきことを提案している。

対人暴力は個々人の行為である。確かに男性性との関係は深く、ジェンダー問題があり、総称すれば社会問題として位置づけることができるが、対人暴力を振るう諸個人のパーソナリティ特性もあり、社会のロジックだけでは漠然としすぎていて臨床的でなくなる。とはいえ、暴力を振るう個人の特性だけに還元すると正義の暴力など「動機の語彙論」がいうような社会的行為という面が後退する。したがって、社会モデルでもなく個人モデルでもない理論を展開すべきだという。

そこで、特性としての虐待性や攻撃性をもとにして、ある一定の傾向をもったパーソナリティが編み上げられ、成人期における家族関係や愛着関係をとおして虐待性向や暴力傾向をもつパーソナリティが形成されることを指摘している。それを構成する相互作用として「親密な関係性」の特徴を把握すべきだという。とくに男性にとっての親密な関係性の分析は重要で、虐待的パーソナリティと親密な関係性論は男性の対人関係分析には有効である。

このアプローチは動機の語彙論と近似している。動機の語彙論は、動機や意味が主観的にではなく社会的に構築されるということを強調しているが、その過程には、当該の意味や記号が選択されているという能動性がある。その限りでの個体差が生まれる。正義の暴力という動機を選択せずに、対話をとおして問題解決を選択する男性もいるので、バタラーはそうした動機の語彙を取捨選択しているという点において能動性があることになる。

主流となっている男性性のなかにあって暴力なしで生きる選択をするにはまた異なる力がいる。これは「デジスタンスdesistance」と呼ばれている。離脱する、遠ざけておく、そうならないようにするという意味であり、その社会にあって支配的かつ主流となっている、また期待される男性性とは異なる方へと、流れにあらがっていくことそれ自体の研究である。別の機会にこの言葉を紹介したい。ここではそれとは異なる虐待的パーソナリティ論と親密な関係性論があることの紹介だけにしておきたい。

男性性が暴力や虐待へと傾斜しやすい特性をもっていること、そして正義の暴力を肯定する社会の側にも共犯性があり、さらに男性性についての主流の物語性があり、そうではない選択をめざして生きることには能力が要る。そして暴力や虐待を選択しない責任があるともいえる。加害者臨床と社会臨床の重なりはこの点を強調する。

こうした文脈で「男らしさの鎧」のひとつとして暴力があり、それを脱ぎ捨てるべきことを男性との面談で指摘すると、「それでは丸裸になってしまい、男性としてこの厳しい社会を生きていけなくなると思う。捨て去ることを考えただけでも不安になる。しかし暴力がいいとは思わない。いったいどうしたらいいのだろうか。」と語る男性は多い。

あるいは、暴力回避のための技術としてタイムアウト法（暴力が昂じていく自分を覚知し、咄嗟の回避としてその場を離れ、クールダウンして相手との関係を再構成するための怒りマネジメント技法）を伝えた際に、「でもそれは逃げているだけで、卑怯な気がする。暴力は行使すべきではないが、その場でとことん議論をして決着をつけるべきだと思うがどうか。」と語る男性も多い。ここには既存の男性性の物語が強く入り込んでいる。

４．暴力を肯定する動機の語彙と文脈をもつ物語性への注目

物語性とはつまり、語彙だけではなく男性性のもつ文脈ということになる。その文脈とは何か。この点に関して参考になる研究を紹介しておきたい。暴力シーンが多いビデオゲームの分析をおこなった調査である。

暴力シーンが多いビデオゲームの多用は実際の暴力を助長するか、暴力の学習として機能しているのかどうかについては意見が分かれる。ゲームを使う個人のパーソナリティ、性、年齢も関係している。そこで暴力シーンだけではなくそれがどんな背景や文脈において存在しているのかについて調べたのがこの調査である。2001年から2002年にかけて実施された。子どもらに好きなゲームを三つあげてもらった。10歳と11歳対象で900人の子どもからデータを得た。日本の８小学校で都市と農村地域からランダムサンプル化した。合計41個のビデオゲームが選択された。そのうち85％にあたる35ゲームに暴力シーンが一つ以上あった。

ゲームの主人公であるヒーロー（暴力行為者）は魅力的につくられている。しかも若い（20歳以下）。外見もパーソナリティもかっこいい。

ゲームでは、その暴力は正当化されている。その理由は、他者や社会を守るため、自らの命を守るため、暴力なしにはゲームが前にすすまないため、報復のためなどがある。暴力を使うことのできない場合がある。相手がイノセントな対象（非戦闘員や市民）である。

さらにナイフや剣などの伝統的な武器が使用されているゲームは51%。そしてリアリティのある暴力かどうかも調べている。すぐにまねができる状況設定となっているとその暴力はリアリティがあると評価する。43%のゲームはそうした設定で暴力が振るわれていた。日常で想定できる場所と状況で暴力がでてくるのだ。

そして大切な変数としての報酬と処罰の体系を指摘している。94%のゲームに暴力の報酬が認められた。暴力の報酬とはそれまでの得点からさらに強い暴力を用いてゲームをすすめることができるというものである。処罰は逆にすすめることができないというもの。後者は17%しかない。

94%のゲームで暴力の結果の苦痛や被害が発生している。マイルドなユーモアは43%にみられ（勝った瞬間に発せられる罵倒的な言葉)、敵意のあるユーモアは66%。闘いの過程では競争も多く用いられている（49%)。ともに協働して敵を倒すゲームは29%。

まとめると、暴力による攻撃性が昂進していく事例として、①魅力的な加害者が存在していること54%、②伝統的な武器使用であること66%、③暴力が報酬をともなう57%、④ユーモアが含まれている60%、⑤暴力は競争的に用いられる49%などが指摘されている。

もちろん暴力だけが模倣されるのではない。子どもは新しい言葉、挑戦、コミュニケーション、問題解決法を学ぶので、そう単純に暴力ものがだめだというのではない。

この調査をもとにして著者たちはゲームに暴力を用いる場合、次のようなことを提案している。①あまり暴力シーンを描かない、②暴力を振るうことを正当化しない、③報酬を与えずに処罰を多くする、④競争的に暴力を用いない、⑤あまり魅力的な加害者像を設定しないなどである。できればより非暴力的な選択肢を推奨する、暴力を正当化せず、報酬をあたえない行動を組み込む、ゲームが暴力とは異なるおもしろみのあるものとして作成されるべきことも提案されている。

（*Gaming, Simulations, and Society* by R.Shiratori, K,Arai, F,Kato eds Springger, The Quantity and Context of Video Game Violence in Japan; Toward Creating and Ethical Standard Akiko Shibuya and Akira Sakamoto）.

ここで紹介したのは単に暴力シーンが模倣されるのではなく、暴力はそれが効果を発揮する一定の文脈をもつこと、つまり物語性があることを理解したかったからである。言い換えれば対人暴力を振るう人にとって語彙は単語としてではなく「文章」として存在しているといえる。学習される暴力があるとすると単発の行為というよりもこの物語性に根ざすことになる。

物語性という点では男性との面談で、暴力は正当防衛の場合もあり、完全な非暴力は難しいといわれる。「正当防衛も否定できるのか」

と。他にも、「どうしても躾をしなければならない危険な場合はどうするのか」、「怒りが昂じて相互のバトルになった場合に止めに入る時の暴力はどうなのか」、「暴力はコミュニケーションの一つの方法で喧嘩のあとには友情や愛情が深まる場合もある」などの物語性についての疑問や意見が脱暴力支援においてよく登場する。個々の行為としての暴力だけに焦点を当てた言い訳論から脱出するためにも、語彙、文脈、状況や枠組（フレーム、モードやスキーマ）という言語行動やそれを支える認知と意味づけのコミュニケーションの成り立ちと感情の処理に関わる過程全体を視野にいれる必要がある。

５．親密な関係性、私的領域・感情における責任や公共性−社会臨床への課題

脱暴力支援が物語性に根ざすべきだとはどういう意味だろうか。動機の語彙をとりまく文脈、枠組（フレーム、モード、スキーマ）などに着目することだと考える。暴力的ではないそれらが暴力を振るう人の内部に構成されることをめざす。

フレーム、モード、スキーマは、親密な関係性が私的な関係・領域と観念されてきたこととともかかわる。公的な介入は親密な関係性や私的な領域を避けてきた。もちろん、親子、夫婦、男女の関係に、とくにコミュニケーションの暴力をも対象にして介入していく根拠をつくることには慎重であるべきだ。

しかし、親密な関係性に宿る暴力こそを排除する仕組みが求められている。私的関係やコミュニケーションと感情のもつ公的性格、言葉や感情表出についての公共性のあり方問題である。

これまで人権という意味では「個人の尊厳」という言い方で根拠づけられてきた。さらに親密な関係性や私的な領域において個人の尊厳をいかにして守りうるのかという課題がここで扱う対人暴力問題である。そのために暴力概念の拡張をおこなってきた。DV防止法では言葉や感情面の暴力も視野に入れた。しかしそれだけでは保護命令が出しにくいとしている。

さらに子ども虐待との関係では子どもの面前で夫婦が暴力を振ることを虐待として位置づけてきた。ストーキング行為では異常な恋愛行動を対象にしている。

くわえて無視するというネグレクト行為を子どもや高齢者虐待では把握してきた。保護責任を問うている。ここで焦点にされているのは、心理的、言語的、感情的な暴力のことであり、ネグレクトのことである。これらは個人の尊厳を傷つけるようにした卑下、降格、侮蔑、罵倒、無視、つまりコミュニケーションの暴力としてある。人の尊厳を傷つけるような儀式のようにして機能するいじめ、罵り、辱め行為がある。

親密な関係性における暴力や虐待、言葉によるコミュニケーションの暴力についてこうした把握をとおしてそれらは決して法外の領域ではないと位置づけられてきた。

暴力や虐待として位置づけ、それを排除するために保護、分離措置や退去命令そして接近禁止命令を発することとしたが、その後の

脱暴力化には極めて難渋している。法外として位置づけないとしたことはよいのだが、処罰を中心にした刑事司法制度では対応しにくい領域へと踏み込んでいるからである。

しかし司法の領域における心理臨床は未成熟である。認知行動療法として応用展開されつつあるが、なお創意工夫の要る分野となっている。何よりも矯正されることに対してはより敏感に拒否反応を示すのが対人暴力加害者だからである。

そして先述してきたように、語彙と文脈や枠組（フレーム、モード、スキーマ）が社会のなかの正義のロジックをとおして暴力を振るうことを肯定し、ささえているのだから、脱暴力のための社会臨床も同時にすすめないと、社会のなかの暴力肯定要素を動機の語彙として取捨選択し、正当化するという負の内面化ループから抜け出せない。

さらに暴力が生成する状況では感情的なものが優位になっている。とくに憎悪関係は、親密な関係性という表出の形式をとおして発現しやすい。他には、人種・民族、障がい理解などにかかわるステレオタイプもある。憎悪や悪感情、偏見と差別、福祉ニーズ蔑視、歪んだ愛着関係による憎しみと愛情などが親子、夫婦、男女、老若、異文化同士（民族間格差）など、「非対称な関係性」において生起する。

とくに親密な関係性にある非対称性はケアという相互行為を成り立たせる関係性でもあり、そのケアは他者への配慮や関与が不可欠であり、境界としては相互に越境するからこそ親密な関係性となる。陰性感情も陽性感情もこうしたなかで濃淡をもって生成する。愛着関係も同じように親密な関係性を母体に構成される。その歪みが暴力の関係的な要因となる。家族の相互作用はそうした関係性が反復される過程である。ここでみてきた親密な関係性、私的な領域、感情表出が家族とはいえ対他関係のなかで表現されるので、そこには公共性が認められるべきである。

こうして家族の外部から、主には法化作用によって、男女間の異常な恋愛、夫婦間の愛憎、親子の監護行為などに内在する暴力性への介入を試みてきた。別言すると「定義」の変更である。「夫婦喧嘩ではなくDVである」、「しつけではなくて虐待である」、「放任ではなくネグレクトである」、「熱情的な恋愛ではなくストーキングである」、「小言や叱責ではなくモラルハラスメントである」などと別様なかたちでの意味づけがなされていく。さらに残る課題は脱暴力の方策の組み込みである一般的にいえば、親密な関係性や具体的な対人関係にかかわる「公共的なものの拡大」あるいは「親密な関係性の構造変化」というテーマとなる（なお、この点にかかわり末尾に参考として引用したインタビュー記事がある。これは相互に敬意を払う関係性尊重規範をリスペクトの必要性としてわかりやすく具体化すればどうなるかという提案をおこなったものであり、脱暴力的な関係性をつくる第一歩の提言である）。

６．虐待された子どもからの手紙への応答−異なる動機と文脈を協働してつくること

では、そうしたコミュニケーションの暴力につながるような動機の語彙をめぐる文脈、枠組、つまり物語を書き換えていくにはどうすればよいのだろうか。憎悪表現などの言葉による暴力にはもちろん排除命令などの法的規制が可能である。くわえて親密な関係性にそくしていえば、その動機の語彙と文脈や枠を書き直すためのさらに独自な支援が求められる。つまり、社会の側に、親密な関係性に介入しはじめた以上、その対人関係の次元から積極的に脱暴力を企てる責務があるということになる。しかも刑罰だけではない脱暴力の工夫をとおしてである。加害者臨床はその格好の実践だと考えている。そのなかからある家族の実例を紹介したい。

児童相談所での家族再統合事業に関わっているが、そのプロセスは慎重であり、ゆっくりとしたものとなる。家族毎に異なるが、コミュニケーションの回復も段階をおってすすむ。

父親の虐待で５年間子どもが保護されていた家族である。父親は男親塾という教室に、母親はマザーズグループに参加し、家族のやり直しを準備していた。二人の子どもを養育する児童養護施設の職員も協力してくれた。一緒に取り組んだ児童相談所の担当ワーカーはアイディア豊かな人だった。プリクラの交換からはじめた。

しかし最近のプリクラは多機能であり、夫婦は美顔モードでとってきた。40歳にはとてもみえない美しすぎる両親となった。これをみた子どもは絶句した。５年も離れていた両親。「これは誰だ」となったのだ。普通のデジカメで写真を撮り直してもらった。

その後、手紙のやりとり、ボイスメール、ビデオレターへとコミュニケーションの濃度を高めていくこととした。手紙の交換の段階で小学６年になった息子から問いかけがあった。「おとんはどうしてあんな暴力をふるったのか」と。体を強くするために相当な回数のスクワットをさせ、へこたれたり、いうことを聞かないときはすりこぎでなぐったりした、罰として冷蔵庫にあるタバスコを飲ませたなどが次々とでてくる。

男親塾で手紙にどんな返事を書こうかと話をした。みんなはとりあえずいったん自分でよかれと思う内容で返事をまとめてみたらということになった。いきなりグループのみんなにまとめてみせるのは難儀だというので下書きするから私にみて欲しいということになり、３枚の便せんに書いてきた。いきなり私がコメントして添削するよりも、みんなの前で読んで感想をもらったらどうかと勧めた。

次回の男親塾で別の父親にゆっくりと大きな声で返信の原案を読んでもらった。みんな子どもになったつもりで聞いて欲しいと指示をした。その下書きは虐待をした理由を書いたものだった。冷蔵庫のタバスコを飲ませた理由はこう書かれていた。「冷蔵庫のなかには薬や酒もあり子どもが飲むとよくないものがあるのだということを分からせたかったから」と。スクワットは強い男の子になって欲しいからだと。

これを聞いた男性たちの感想は一様に、「なんだか悪いのは自分みたいに聞こえる」だった。虐待した理由の説明は子どもを責める内容になっているのだ。子どもをしつけるためにということらしいのだが他に方法はなかったのかと思う。結局は言い訳にしかならない。説明すればするほどこうなる。暴力や不適切な手段を用いていうことをきかせ、親の思うようにさせようとするのだから、説明する語彙は貧しいし、そしてなによりも文脈が間違っている。ではどうすればいいのだろうか。語彙と文脈を変えない限り親子のコミュニケーションは再開できない。男親塾で考えた。

最後はこうなった。「すまん。恥ずかしいけど間違ったことをしていた。だからおとんは男親塾というところで親をやり直す勉強をしているんや。おかんにも迷惑かけていた。」という短い返信となった。

手紙のやりとりをすることさえできずにいた親子のコミュニケーションの再開はこうしてはじまった。ボイスレターもやった。そして考案したのがビデオレターだ。

親が並んでビデオに向かって元気かと呼びかけるのは不自然きわまりない。担当ワーカーが考えた。私がインタビューを両親にするというものだった。大阪城公園でロケをした。撮影日や場所、インタビュアーの氏名や男親塾長という肩書きも字幕にして入れてもらった。

「お父さん、最近、親のための塾に通っているそうですね。それはどんなところですか。勉強になっていますか。」と私が質問した。少々ぎこちなく彼が答えた。「そうですね。私は親としては失格でした。いまから思うと間違った子育てでした。児童相談所によって二人を保護された後に、お母さんと考えました。これからどうしようかと。こんな塾があるけど行ってみないかと提案されて通い始めたんです。いろんなことが勉強になりました。親としては５歳くらいの段階だったのかなと思います。子どもためにというのは言い訳で自分がむしゃくしゃしていたから虐待をしていたんだと気がつきました。」と話をしてくれた。

お母さんにも聞いた。「塾に通い始めたお父さんはどうですか。」と。「そうですね。塾のあった日は必ずこんな話をしたとかこんなことに気づいたとか話が弾むんです。」と答えてくれた。トータルで15分くらいに編集した。自然なかたちの会話になったと思う。

次にそれを子どもたちにワーカーがもっていった。そこでさらに工夫した。施設の食堂でビデオレターを観ている二人の様子をビデオに撮ってもらったのだ。小学６年の息子と５年の娘が真剣に見つめている様子が映っている。それを両親にみてもらった。

両親が努力する様子のビデオレターをみて、「おとんの目がたれている。やさしそうな顔つきだった。」という感想を息子はもらしてくれた。その直前に届けた写真は施設の部屋のなかに貼ってあった。

７．脱暴力への動機の語彙を社会のなかに蓄積していくために男性性の物語を書き換える

想像することができる。家族のやり直し計画をたて、ゆっくりとコミュニケーションを回復させていくこの過程で用いられている語彙、文脈、コミュニケーションモード、ものの見方としてのスキーマが変容していく様を。正義の暴力は協働で書き換えられつつある。男親塾に通いだして２年が経っていた。その後も協働した変容の取り組みは今も続いている。息子は現在、中学２年になっている。

月に一度、この夫婦と面談を継続している。どこの家庭にもある家族の日常の何気ない会話ができるようになった話でいつも時間はあっという間におわる。今月は息子の中間試験の結果と塾通いの話だった。いろいろ課題はあるがそんな話題に終始するほどに家族を営んでいる様子が嬉しく思えた。暴力と虐待があった時とはまったく異なる語彙が増え、文脈も変わり、コミュニケーションモードが葛藤解決志向となっている。子どもたちをみるスキーマも変わり、自立ということがものの見方の根幹にすわりはじめたことがわかる。

夫婦の関係性の取り方もわかる。夫は妻のことを「あなた」と私の前で呼びかける。以前は「お前」とか「こいつ」だった。そのことを面談で指摘したらはにかんでいった。「世話になっているから」と。

動機の語彙は家族の営みにそくして協働で書き換えることができる。動機が社会のなかから選択されるのであれば、社会の側はそれを書き換える用意をしておくべきだろう。

（2013 年 11 月 30 日受理）

参考：『京都イクメン図鑑』Vol. 2（編集・発行 おふぃすパワーアップ、2012 年）より

イクメン考

立命館大学教授　中村 正 先生

妻を支える ホットなサポーターになろう！

臨床社会学などを研究されている立命館大学教授の中村 正先生。教師として活躍する妻の海外赴任時には、娘との父子生活の経験もある元イクメンです。

現在、大阪府内の児童相談所において、虐待する父親向けの「男親塾」を主宰するなど、学外でも積極的に活動しています。そんな中村先生に男親の役割について聞きました。

男親の役割とは？

大阪の家族再統合支援事業の一環として虐待する父親を対象にした「男親塾」。参加者同士が自分の体験を話し、傾聴し合う中で気づきを促すグループワークです。中村先生は参加者から「塾頭と呼ばれていますよ」と笑います。

参加する父親の多くは〝しつけ〟だと考え、暴力をふるっていました。児童相談所の介入によって子どもは保護され、家族はバラバラになっています。まずは「あんたの役割は脱暴力。育児や家事をしようと思わなくてもいい」と伝えているという中村先生。少しずつ参加者の意識を変え、家族が再び一緒に暮らせるよう、家族再統合へと導きます。

「『子育ては妻の役割で、自分は関係ない』と思うこと、それは〝冷淡な傍観者〟の意識です。いじめの場合を考えるとわかりやすいのですが、その意識自体が虐待につながるリスクがあると気づいてほしい」と話します。（下図参照）

印象的なエピソードがあります。

「週末だけ子どもと過ごせるようになった父親が、小学校高学年になった息子と、公園で自転車に乗る練習をした体験を話しました。養護施設には自転車がなく、その子はうまく乗れません。大きな子が補助輪を付けた練習なので、周囲の目が気になりつつ、でもうれしくもあったという話に、ほかの参加者は、父親の役割ってこういうことかとわかったようでした」。

傷ついた家族のやり直しには長い時間がかかります。このような取り組みを行う自治体は多くありません。関係機関と連携しながら、息の長い支援を行っています。

小さなステップから始める

困難な問題を抱える家族を見てきた先生は、普通の家庭生活を営んでいる父親は全員イクメンに思えるそう。「仕事も家事も育児も平等にやるという、スウェーデン型の男女平等モデルが強く入り過ぎてる気がします。イクメンへの道も一歩ずつ、小さなステップでいくことです。今は稼ぐだけでも大変。仕事で家にいないということも家族の生活を支えているのですから、亭主元気で留守

冷淡な傍観者からホットなサポーターへ

【冷淡な傍観者】
- **いじめ**：いじめの現場を見て見ぬふりをする。
- **子育て**：子育ては妻の役割なので、関わらない。

↓

【ホットな傍観者】
- **いじめ**：誰が誰にいじめられているかを先生などに知らせる。
- **子育て**：何かあったときに、行動する。

↓

【ホットなサポーター】
- **いじめ**：自らいじめを止めようと動く。
- **子育て**：妻が子育てしやすいように支える。

がいいというジョークはやめるべきでしょう」。

夫婦間でリスペクト関係を築く

そのために夫婦がお互いにリスペクト（尊敬）し合う関係を築くことが大切で、子どもはそれを察するとのこと。「リスペクトを破るのが暴力なんです」。

例えば、妻が「同窓会へ行く」というのを「行くな」と言わない。暴力ではなくても、行動制限をするということで、精神的支配を意味します。「妻がしたいことを自由にできるようにサポートする。そうすることでリスペクト関係が高まります。安心して子育てできる一歩になるはずです」。男親塾では、リスペクト関係を表現するステップリストを作っています。（例参照）

「妻をリスペクトし支えることは、積極的に父親も育児をするということではないんですが、家族のまとまりを良くするために夫ができることです。イクメンの大きなテーマだと思います」。

社会規範を育てるには

先生によると、日常的な善悪は母親から教わり、仕事を通した責任や規範を父親から教わったという大学生が多いようです。

社会規範やしつけに関しては、「～するべからず」という他人からの禁止の規範ではなく、自分で自分を律する規範が身についているかどうかを考えたほうがいいと言います。

ある父親は「嘘をつくな」としつけていました。すると子どもは、叱られないために「嘘をついていない」という嘘を重ねるようになります。全く嘘をつかずに生きていくのは無理なこと。大きな犯罪的嘘にならないよう、適度な罪悪感を育むことが大切だと先生。

叱るときには「嘘をつくとは何事だ」という〝あなたメッセージ〟ではなく、「嘘をつかれて悲しい」と、自分の感情を言葉にする〝私メッセージ〟で話すことが大事だとアドバイスします。「自分をコントロールできる子どもに育てていくために、家族のコミュニケーション教育が果たす力は大きいです」。

また、社会的な環境も必要だそうです。「親の価値観に閉じ込めないために、親子で地域や園、学校の行事やクラブに参加して、共同体験を重ねるのが良いですよ」。

「冷淡な傍観者ではなく、妻を支えるホットなサポーターになろう」と先生は呼びかけます。夫婦関係やコミュニケーションを再確認し、小さな一歩から始めてみませんか。

★ステップリスト★

【例】妻が体調を崩しているとき

STEP 1
- 「夕飯を作れ」と言わない。

STEP 2
- 自分の夕飯を自分で買ってくる。
- 外食などで済ませてくる。

STEP 3
- 妻におかゆなどを作る。
- 子どもの夕飯を準備する。

STEP 4
- 会社を休んで（休めなくても）、看病と家事を行う。

中村　正（なかむら ただし）先生

立命館大学大学院応用人間科学研究科・産業社会学部教授。専門は臨床社会学、社会臨床学、社会病理学。カリフォルニア大学バークレー校、シドニー大学で客員研究員を経験し、家庭内暴力対策を研究。児童相談所、刑務所などにおいて、DV、虐待、性犯罪などを対象にした男性向けの加害者臨床を実践している。著書：『「男らしさからの自由」模索する男たちのアメリカ』（かもがわ出版）、『家族のゆくえ―新しい家族社会学』（人文書院）など多数。

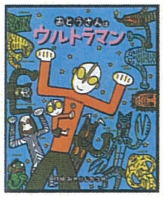
お父さんのための絵本教室

中村先生が感情を言葉にして語りかける練習にと、取り組んでいるのが「お父さんのための絵本教室」。

父親が気持ちを込めて絵本を読む練習をし、その後、子どもに読み聞かせを行うというワークショップ。今年は、青森県でボランティア活動として継続しています。

「お父さんが読むのに適した絵本がたくさんある」という、中村先生おススメの絵本をあげました。ご家庭でもぜひ読み聞かせをしてみてください。

★「お父さんはウルトラマン」
宮西達也 著（学研）



宮西達也 著のティラノサウルスシリーズもおススメ。

★「パパ、お月さまとって！」
エリック カール 著（偕成社）

★「100万回生きた猫」
佐野 洋子 著（講談社）

★「じごくのそうべえ」
田島 征彦 著（童心社）

など